

## ワークショップの有効性についての考察 —若草バルーンプロジェクトの実践を通して—

### Consideration about the effectiveness of the workshop — Wakakusa Balloon project practice —

丹 治 嘉 彦

#### 1.はじめに

本プロジェクト、わかさバルーンプロジェクトは令和1年10月2日新潟市北区福島潟に隣接する休養地において、児童養護施設新潟県若草寮に在籍している子どもたち、職員、新潟大学教育学部芸術環境講座造形表現コースの学生、そして新潟市北区の方々を中心となって行われたものである。また、プロジェクトはその日限りの一過性のプロジェクトとして計画されたのではなく、10月2日の実施日に向けて子どもたちや地域の方々といくつかのイベントを通して濃密な関係性を構築し、それぞれが有機的に繋がり人の記憶に刻まれる「もの」あるいは「こと」になることを大きな目的として行われたプロジェクトである。

現代社会において、ワークショップは様々な分野において行われているが、表現行為を核としたものも幅広く実践されている。筆者はこれまで様々なワークショップをアートプロジェクト等を通して実践してきたが、本プロジェクトで行ったワークショップも芸術表現のもつ可能性を内包したものである。本論文はプロジェクトにおけるワークショップの実践的な知見等に基づき、それが持つ意味と有効性を中心にまとめた実践研究である。

#### 2.プロジェクトの背景

本プロジェクトを行うことになったきっかけは、



(図1) プロジェクトメインポスター

新潟県児童養護施設新潟県若草寮から筆者に絵画の指導を担ってもらえる学生はいないだろうか?との相談を2018年の11月に受けたことからだった。

この件に関して最初の打ち合わせは平成30年12月に施設の寮長石橋氏とで行った。「絵画が得意な子どもがいるので、自信をつけてあげたいから是非学生さんに先生役をお願い出来ないか。」との依頼

と、また同時に施設に関して説明を受けた。この新潟県児童養護施設新潟県若草寮は新潟県が運営している施設で、予期できない災害や事故、親の離婚や病気また不適切な養育を受けているなどの様々な事情により、家族による養育が困難な2歳から概ね18歳の児童が家庭に代わって自立を支援している。と概略を伺った。またその定義としては、国が定めた児童福祉法により「助産施設、乳児院、母子生活支援施設、保育所、幼保連携型認定こども園、児童厚生施設、児童養護施設、障害児入所施設、児童発達支援センター、情緒障害時短期治療施設、児童自立支援施設及び児童家庭支援センターとする。と定められているが、同様に児童養護施設の目的は同法第41条「児童養護施設は、保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設とする。」と規定されている。まず筆者自身このような施設が新潟市内に存在していることを知らなかった。また、上記のような施設が規定の元に運営されている中で、子どもたちが寮長はじめ職員の方々のもとできちんとした生活を送っていることに心を強く打たれた。寮長から施設説明を受けた後に子どもたちと言葉を交わす中、何某かの物語を紡ぎだしたいと考えるに至った。むしろこれに対して施設の子どもたちに手を差し伸べると言った感傷的な態度でのぞむことは意味をなさないだろう。そうではなく、子ども達や施設の職員の方々とともに皆で面白いものを作ることが出来ないかと考えた。それは単に課題設定を伝えた後に予定調和的な形態を引き受けることではない。施設の子ども達、そして関わった人それぞれが達成感を得る仕組みを組み立て、その証としてプロジェクトを実践することが依頼のあった絵画の指導に代わるものとなる。例えば、「好きな絵を描いて出来上がった作品を飾ろう」と言った命題が与えられたとするなら、作品を描いた子どもとそれを鑑賞する施設の方々との新たな関係が生まれるが、それは作品と鑑賞者だけの限られた空間に限定される。関わった人が限定的でしかも一過性のものとして処理され、同様に依頼を受けた子どもへの支援が彼らの周辺だけで収束してしまう可能性すら生じる。その問題を解決するには筆者が実践した様々な人を巻き込んだ形のワークショップを含んだプロジェクトの実施が何よりも有効であると思わされた。

これを実践するには子どもや大人、あるいは誰も

が参加出来る形で、しかもそこには技能的な優位性を感じさせないものであることが何よりも求められる。仮に技能的に優れている人だけのものに終始してしまえば関わる人の中で優先順位が付いてしまい、経験値がない人が関われないことが予想され、限られた人だけによるワークショップとなるだろう。この事項を避けてプロジェクトを実践することにした。

### 3. ワークショップの実践

このプロジェクトは新潟県児童養護施設若草寮の子ども達を中心に新潟大学教育学部芸術環境講座造形表現コースの学生、そしてこのプロジェクトに関わった人がそれぞれ楽しめるものとなることが求められる。それはプロジェクトに関わった人にとって主体的な要素を十分に含んだものであることが前提で、しかもスタートからゴールまで皆が関わりながら成し遂げることをその意義と捉える。以上を踏まえプロジェクト実施に向けて計画を立てた。

#### (1) プロジェクトにおける形態の決定に向けて

プロジェクトの実施に向けて先ずはプロジェクトを行う場所、そしてどのような内容にするのかを決めなければならなかった。このプロジェクトは様々な人々が参加するが、その中でも子どもたちがその中心となる。それを念頭においてプロジェクトの中身を決めなければいけない。例えば、関係者だけで計画・実践するならば、予定も立て易い手続きも簡素化できるだろう。ただし、そうなると前例に倣って粛々と実践すればよいだけの魅力に欠けるものとなり、新たなイメージを纏ったプロジェクトが生まれにくいだろう。そうではなく、子どもを含めて参加者がそれぞれ自由闊達に自分の考えを述べ合い、そこから積極的なアイディアが出ることを大いに期待した。そしてこれを具現化するためのワークショップを若草寮において実施することにした。

最初のワークショップは若草寮の子ども達、施設の職員の方々そして大学生とで行った。先ずは参加者同士の自己紹介を行い、プロジェクトを何処で行うのかそして、どうすれば面白くなるのか等を話合った。実施する場所に関しては、若草寮が立地している新潟県北区内で行うのが良いとの意見が多数を占めた。(プロジェクトで作り上げたものを近くの方々に披露できることの理由からである。)ただし、プロジェクトの内容については、決定に至るまで多くの時間を要した。実は大学内でこのワークショップを行う前に学生から「若草寮の子ども達と

会話しただけ、下を向いている子ども達が多かった。」との声をいくつか聞いていた。職員の方にこの件を尋ねてみると照れ臭さ等が要因ではないかとの連絡を頂き、これを解決するため子ども達を含めて参加者同士が距離を縮めるための手立てを皆で考えることになり、プロジェクトは子ども達ははじめ参加者の目線を上げる形態とする。そして市内北区の広場でダイナミックに展開するプロジェクトであることをイメージし、それを具現化する形でバルーンを打ち上げることになり、プロジェクト名も若草バルーンプロジェクトとなった。

## (2)プロジェクト実施に向けての参加者同士の結びつき

プロジェクトを実施する上で参加者同士が楽しむために若草寮において昼食等の時間に自己紹介を兼ねた場を幾度か設けることや、若草寮の子ども達や学生が一緒になって地域の祭り等のイベントに参加することによって相互の理解が深まると考えた。例えば会話の中では中学校での出来事を大学生に話し掛けたり、大学生と子ども達がゲームで盛り上がる光景が見受けられたが、これらは参加者同士がリラックスした時間を築いたからに他ならないだろう。また、地域の自治体が企画した夏祭りへの参加も関係性の強化につながったことは言うまでもない。

## (3)ワークショップの実施

プロジェクト参加者同士の関係が深まったことから、プロジェクト実施にむけての広報や内容を深めることを目的としたワークショップを組み立てることになった。まず皆が楽しめる時間と場をつくりつつ、そしてそれを様々な人に見てもらふ形態にしたが、プロジェクトの核を「上を見上げる」としたことから空間の上部に注目に値する形態を設えて、その空間を楽しんでもらうワークショップを考案した。このワークショップはプロジェクトそのものを知ってもらふことが根底にはあるが、子ども達が生活している新潟県児童養護施設新潟県若草寮を理解してもらふことも目的の一つとした。そのためにワークショップを実施する場を若草寮の体育館をそれにあてることとした。(体育館は日頃子どもたちの活動の場であり、また多くの人が集う場にも適していた。)ではこの体育館においてどんなワークショップを実践するかだが、まずは「上を見上げる」をそのテーマに据えて子どもたちとやり取りを行い、型に囚われないものが多数出てきた。また「上を見上げ

時間	ワークショップの内容	支援における留意点
10:00	導入 題材の告知 「みんなでつくろう バルーンワンダーランド」	地域の方々を含めた みんなで一つの作品を作る 協働性を意識する。  風船をたくさん作ることでダイナミックな空間を演出する。
10:10	展開 バルーンワンダーランド を作ろう  布を配布する	脚立に上る子どもの支援を含め安全面に心掛ける。  ・最初にうまく空気が入れられない子。風船の口を結べない子どもに支援を行う。
10:30	作品制作・展示 ・最初は指導者と全員と一緒に風船を膨らませて布に投げ入れる作業を行う。 ・2作品以降は各自のペースで進める	・はじめは風船を膨らませるだけと思われる。慣れるにつれて、風船同士を繋げて構造体を作る参加者が出てくると予想されることから、道具の使い方の支援を行う。
12:00	昼 食	
13:00	作品制作再会	参加者の集中度合を見て制作終了
14:00	まとめ 作品制作終了、片付け	体育館全体から見てもらったり、様々な角度から鑑賞する。
15:00	作品鑑賞	自分たちの頑張りを気づかせる言葉がけをする。

(図2)「みんなでつくろうバルーンワンダーランド」ワークショップのスケジュール



(図3)「みんなでつくろうバルーンワンダーランド」ワークショップの風景

る」ことを目的にしたと同時に、地域の方々が気軽にこのワークショップに参加出来るプログラム構成にした。具体的には体育館中央に白い風船を密集させた空間を作りそれを囲むように子ども達の作品を配置し、そこを中心に円を描くような導線を描く。また、芸術作品を楽しんでもらうために、白いビニールテープや白いバルーンをカーテンのように頭上から垂らし、空間を密にしながら全体像を白色を基調とした非日常の空間を作り上げ実施に至っ

た。また、参加者が楽しむことができるようそれぞれに風船を渡して好きなところに投げ入れる動作を展示作業の一部に組み込むこととした。そして、ワークショップの参加者は子ども達は当然のこと、地域の方々の参加も促し、世代や関係者あるいは部外者等の分け隔てなく一つの作品を皆で作り上げることを大きな目的とした。ワークショップ当日、施設の子ども達と近所の方々が体育館に集まり「みんなでつくろうバルーンワンダーランド」を体験した。紐を張った体育館上部に膨らませた風船を次々に並べたり体育館中央に同じ風船を重ねたりする様に、子ども達を含めた参加者が歓声をあげワークショップを楽しむ光景を見ることが出来た。風船そのものは普段の生活の中で扱うことはあまりないが、それらが集積した様は見慣れた風船とは違ったものに見えただろう。また、風船を集めて出来る形態は一人で出来るものではなく、膨らませて出来た風船をそれぞれが参加者がどこに置くのかを模索しながらの行為となる。風船の配置に関して自分の風船が他者の風船の隣に配置されたらどう見えるのか等、様々な思いが参加者の脳裏を過ぎたに違いない。ワークショップを通した一連の行為によって普段の体育館の風景が大きく変容したが、それは風船を膨らませた個人の思いだけで出来上がったのではなく、参加者同士のやり取りを経たことにより生まれた風景と言える。

#### 4. 若草バルーンプロジェクトの実施

最終ゴールとなるバルーンを打ち上げるイベントに関しては、具体的な内容と場所は白紙の状態では、まずはプロジェクトの主役となるバルーンの形態と実施場所を決めなければならなかった。これに関してはプロジェクトの経験値がある大学側でバルーンのデザイン案等を決定して進めればプロジェクトがスムーズに運ぶだろう。だが、それよりも皆がバルーンのデザイン案等に関わることが重要であり、具体的にプロジェクトに関わることでプロジェクトそのものが参加した人のものとなっていくと考えた。この主体的に関わるワークショップをベースに子ども達に「どんなバルーンを打ち上げたら面白い?」と問いかけを行ったが、そこからいくつかのアイデアが出てきた。出てきた案は電車、天ぷら、進撃の巨人の壁、芋虫、気球、あるいはかつら等である。バルーンは丸いイメージでしかも単体で浮かんでいるのが一般的だが、彼らかが発案した電車や天ぷらといったアイデアそれぞれが渾然一体となって空



(図4) 子ども達から出たアイデアをもとにしたプロジェクトのアイデアスケッチ

に浮かんだらと想像するだけでも面白い。この既存の枠に囚われないアイデアが出た背景には、学生達がワークショップにおいて子ども達との関係性を密にし、ファシリテーターとして自由な発言を誘発する場を作り上げたことがこれらのアイデアを誘発したことに繋がったと言えるだろう。これら子ども達から出たアイデアをもとに、若草バルーンプロジェクトの実施にむけて動き出したが、まずプロジェクトを実施する場所を決めなければならなかった。市民がこのプロジェクトに参加し易い場所、また若草寮の子ども達が気軽に足を運べる場の候補として、北区を流れる阿賀野川河川敷、同じ北区内の福島潟の自然学習ゾーンを候補とした。実際にそれぞれの現場に足を運んでみると活動し易いフィールドが広がり、しかも見上げるとバルーンを打ち上げた風景が美しく映えることが大いに予想されたが、実行委員にこの件を相談すると台風シーズンでもあり川水の増水が予想されることから、阿賀野川河川敷を避け福島潟の自然学習ゾーンにて実施することになった。また、打ち上げるバルーンの形状は子ども達のアイデアをもとに制作を進めるが、現場のレイアウトや当日のスケジュールは学生のアイデアをもとにして作ることとなった。

実際のバルーンのデザインに関しては、子ども達からの提案であるかつらや電車といったバルーンの形状は、そもそもオリジナルなものがないことから打ち上げることは困難であると予想された。この問題を解決するには、バルーンを扱う業者にこの案件を委託すれば福島潟上空に子ども達が描いたイメージのバルーンを見ることが出来るだろう。だがこの問題を業者任せにするのではなく、プロジェクトに関わっている皆で考え、そこから解を出してプロ

プロジェクトを成功に導くことが何より重要であると考え。例えば電車に関しては、色の違う風船同士を繋げること、またかつらはテントを利用してあたかもかつらが浮いているように見せる等である。これらは直接的な表現ではなく、その事象に対して「見立て」あるいは「隠喩」と言ったことが引用された。

プロジェクト当日は多少風く雲が多かったが、プロジェクトを行うには絶好の日和となった。会場となった福島潟の自然学習ゾーンでは子どもたちが自分たちが出したアイデアをもとに工夫を凝らしてバルーンを作ったり、それらにガスを入れて浮き上がる様を見上げたり等、様々な光景を見ることが出来た。また当初この制作に関わることを決っていた子ども達が打ち上げられたバルーンを見上げて、興味が湧いて参加しはじめたりする姿等も見受けられるようになったが、それでもプロジェクトに交われない子どもも数名いた。



(図5) 新潟市北区 福島潟 自然学習ゾーン  
わかくさバルーンプロジェクト正面

そのような彼らに学生が近づき声をかけ、バルーンを作り方を丁寧にアシストした。この支援によって制作に加わる子ども達が増えた。これらはプロジェクトが進む途中で起きたイレギュラーと言えるが、それをしっかりと受け止め誰もが一律に参加できるプロジェクトこそが理想系であろう。主催者、参加者区別なく皆がこのバルーンを打ち上げることを楽しんだ今回のプロジェクトはこの理想系に限りなく近い。



(図6) わかくさバルーンプロジェクト  
風船制作風景 1



(図7) わかくさバルーンプロジェクト  
風船制作風景 2

## 5. まとめ

参加者同士がワークショップを通して作り上げたダイナミックな空間は、参加者がそれぞれ主体的な態度で臨んだ証でもあろう。表現行為は単独で発案

(イメージ)し、表現されたものも発案者が行うことが一般的とされてきた。そこには他者の考え等が侵入することではなく、表現は個人単位で行われるものとして認知されてきた。しかし、現代社会において表現形態が変容する中、ワークショップを通して現れた作品やものとして残らない作品等も当然のように見ることができるようになった。これらの作品は現代における表現の多様化が進む中、他者と相互のやり取りを行ったことの現れと言えるだろう。しかしその関係性は発案者からの一方的なものではなく、双方向からの丁寧な対話から見えてくるものが何より重要と言える。対話の中心は合意で成立するが、反対のポジションとなる異質なものが当然のことながら生まれるだろう。その隙間を埋める手立てとして、思案したりあるいはそこを繋げる手立てとしての表現こそ現代におけるアートの本質であり、ワークショップの意義もそこに内包される。

今回若草バルーンプロジェクトにおけるワークショップの舞台から生まれた様々な表現は単に表現形態を演じただけではない。今まで見ることの出来なかった風景を垣間見ることが出来たり、人との新たな出会いを多々誘発した。

このワークショップに関わった人が打ち上げたバルーンは当日様々な様相を見せてくれたが、この光景はそれぞれの記憶に残ったことは間違いないだろう。その記憶をもとに参加者それぞれがオリジナル



(図8) わかくさバルーンプロジェクト  
風船打ち上げ風景 1

のバルーンを上げてくれるだろうか。コロナ禍の今下を向いてしまいがちだが、上を見上げればきっと何処かにオリジナルのバルーンが上がっているに違いない。



(図9) わかくさバルーンプロジェクト  
風船打ち上げ風景 2